類義語ミアヤマル・ミマチガエルの意味分析

鷲　見　幸　美

キーワード：ミアヤマル（見誤る）、ミマチガエル（見間違える）、類義語、捉え方、認知言語学

1　はじめに

本稿の目的は、類義関係にあるミアヤマルとミマチガエルの意味について、その共通点と相違点を明らかにすることである。両語が類義関係にあることは、以下の（1）の「見誤まる」を「見間違える」に、（2）の「見間違え」を「見誤り」に置き換えても、文全体のおよその意味が変わらないことから明らかである。

（1）　得意なボールはツーシーム。様々な変化をすることから、自軍のスコアラーですらスライダーやフォークなどと見誤まる[1 2]らしい。
（http://www.tora-life.net/members/2006/26egusa.html）

（2）　明治 39 年、土地所有者が林道開拓した時、キンコウカの葉の大群落を菖蒲と見間違え「アヤメ平」と名付けたといわれています。
（http://www3.kannet.ne.jp/~bluebery/oze-2.htm）

しかし、ミアヤマルとミマチガエルは、形式が異なる以上、意味が異なるはずである。では、どのように意味が異なるのであろうか。また、意味の異なる２語はどのような事態を言語化の対象とした場合に置き換えが可能であり、それぞれの語は事態をどのように概念化したものだろうか。すなわち、捉え方はどのように異なるのだろうか。

本稿は、認知言語学的意味観に基づき、意味を考察する。まずミアヤマル、ミマチガエルそれぞれの複数の多義的別義を分析・記述した上で、異なる意味を持つ２語を置き換えても「意味がほぼ変わらない」と感じられるのはなぜかを明らかにする。

2　類義語辞典における意味記述とその問題点

本節では、類義語辞典におけるミアヤマルとミマチガエルの意味記述を取り上げ、その問題点を指摘する。まず、『三省堂類語辞典』（2005：489）では、以下のように記述

されている。

１）見誤る：見てそれとは違うものと判断する。「標識を－」
２）見間違える：間違って見る。「量を－」

この記述から、ミアヤマルは「判断の失敗」、ミマチガエルは「視覚の失敗」という違いがあることが伺える。しかし、以下のような例を見ると、この両者の違いが明確には感じられない。

（３）　ＡからＮまでには十四のアルファベットが含まれているのに、十三個と言った訳は、Ｉが数字の１と見誤りやすいので使われておらず、Ｈ棟の次はＪ棟となっていたからだ。（『若き数学者のアメリカ』298-299）

（４）　それから、高級ホテルなどにいる顧客相談係 “Concierge” も、「コンシェルジュ」ではなく、「コンシェルジェ」と書かれることが多い（この前某公共放送でもアナウンサーがそう発音していた気がする）。これはカタカナの「ユ」と「エ」が似ていて見間違えたからと思うのだが、どうなのだろう・・・
（http://my.spinavi.net/amedee/index.php?itemid=95&catid=1）

（３）において、アルファベットの「Ｉ」が数字の「１」と「見誤りやすい」のは、文字の形が類似しているためである。また、（４）においては、カタカナの「ユ」と「エ」を「見間違えた」と考えられるのは、文字の形が似ているためである。そのように考えると、「判断の失敗」と「視覚の失敗」の違いが不明瞭である。

また、以下のような例の存在から、１）２）の記述は十分なものとは言えない。

（５）　首相は周囲に「ある程度覚悟の上だ」と強がったが、世論を見誤ったのは明らかだった。（中日新聞　2009/06/23）

（６）　話しを戻すと、マスコミはどのような状況で虐待や無理心中が起きたのかということで、行政は何をやっているんだと、行政の責任を問うこともあります。これは、本質を見間違えているのではないかと思うのです。
（http://blog.livedoor.jp/elric2000/archives/cat_50035575.html）

１）の「見てそれとは違うものと判断する」、２）の「間違って見る」の「見る」は、「視覚によって対象を認知する」と解釈されるが、（５）の「世論」、（６）の「本質」は視覚で捉えられるわけではない。「見る」は多義語であり、「視覚によって対象

を認知する」という意味の他に「対象を理解・判断する」という意味も持つが（田中：1999）、１）の意味記述を「理解・判断してそれとは違うものと判断する」と解釈するのは不自然である。また、２）の意味記述を「間違って判断する」と解釈すると、「見間違える」は「見誤る」同様に「判断の失敗」を表すことになってしまう。このことから、（５）のようなミアヤマルの意味、（６）のようなミマチガエルの意味は記述されていないと言える。

次に、『講談社類語辞典』（2008：246）の記述を取り上げる。

３）見誤る：［文］ある物事を間違って別のものと見る。「彼の兄を彼と－」
４）見間違う：「見誤る」の、より一般的な言い方。「B 君は、最近、有名人に見間違われたらしい」
５）見間違える：「見間違う」の、より口語的な言い方。「女性に見間違えて、男性に声をかけてしまった」

この記述によれば、ミアヤマルは文章語であり、ミアヤマルとミマチガエルには文体差があるということになる。しかし、この記述には以下のような反例が存在する。

（７） 毎週同じ時間に行くのに、いつもちょっと遅刻しちゃいます。未だに今の家での準備にかかる時間を見誤っちゃう。
（http://www.celeste-jp.com/article.php?id=639）

（７）は、第一文に「ちょっと」と「てしまう」の縮約形「ちゃう」という口語表現が用いられている。それに続く第二文で用いられた「見誤る」自体にも縮約形「ちゃう」が後接しており、文章語だとは言い難い。また、次の（８）（９）にも、文体差は感じられない。

（８） JR 西日本によると、原因は、男性運転士が列車の停止位置を知らせる目印を普通列車のものと見誤ったためとみている。この列車と後続列車の運休や遅れはなかった。（中日新聞 2008/02/28）
（９） JR 西日本金沢支社によると、五十代の男性運転士が時計を見間違え、発車時刻と勘違いしたまま大野市朝日の九頭竜湖駅を出発。二駅先の勝原（かどはら）駅の手前で気づいたという。（中日新聞　2009/01/03）

（８）と（９）は、同じ新聞において、同じような JR の事故を報道する記事であるが、

（８）では「見誤った」が用いられ、（９）では「見間違え」が用いられている。ミアヤマルとミマチガエルの違いは、文体差にあるとは言い切れない。

３　分析

３．１　ミアヤマルの意味

本節では、ミアヤマルの有する２つの多義的別義を記述する。各多義的別義については、まず分析の結果である意味記述を示し、その意味を例文に基づき説明するという順で進める。最後に、２つの多義的別義から抽出されるスキーマを明示する。

３．１．１　多義的別義１：＜主体が＞＜具体物を視覚で捉え＞＜実体とは異なったモノとして＞＜解釈する＞

(10)　たき火、煙突等の煙等を火災と見誤って通報してきたものをいう。
（fire.city.kanazawa.ishikawa.jp/action/.../h15_syouboukatsudou_web.pdf）

(11)　ただ一般にはこうした崩壊性堆積物の多くは、それが山地部と平野部の境界にあるせいか、しばしば現在の新しい崖錐性堆積物あるいは扇状地性堆積物と見誤まられることがあるので注意を要します。（『アーバンクボタ』No.17）
（www.kubota.co.jp/urban/pdf/17/pdf/17_3_4.pdf）

(12)　玄能石は、ゲンノウ型以外にも、星型やコンペイトウ型のようなものもありますが、いずれもとがった形をしているのが特徴です。その形から、明治時代の考古学者は、石器だと見誤まっていたこともありました。
（http://www1.tecnet.or.jp/earth/4Travel/4_07/4_62.html）

(10) の「通報者がたき火、煙突等の煙等を火災と見誤る」は、通報者が「煙等」を視覚で捉え、その実体が「たき火や煙突等の煙」であるにも関わらず、それとは異なる「火災の煙」だと解釈することを表している。(11) の「崩壊性堆積物の多くを現在の新しい崖錐性堆積物あるいは扇状地性堆積物と見誤る」は、主体が「（山地部と平野部の境界にある）堆積物」を視覚で捉え、その実体が「崩壊性堆積物」であるにも関わらず、それとは異なる「現在の新しい崖錐性堆積物あるいは扇状地性堆積物」だと解釈することを表している。(12) の「明治時代の考古学者が玄能石を石器だと見誤る」は、明治時代の考古学者が「とがった形をしている石」を視覚で捉え、その実体が「（もともとそのような形をした）玄能石」であるにもかかわらず、それとは異なる「石器」だと解釈することを表している。

ここでの「解釈」は、「知覚による認知」とは区別されるものであり、「思考に基づく判断」だと考えている。つまり、知覚によって認知した対象を、主体の知性を介在させ

て「何であるか」を判断することである。思考を経てこそ解釈に至るのであり、「何であるか」を判断するということは、「どのカテゴリーに属するか」を判断することである。このプロセスを、(12) を例に図示すると、以下の図１ようになる。

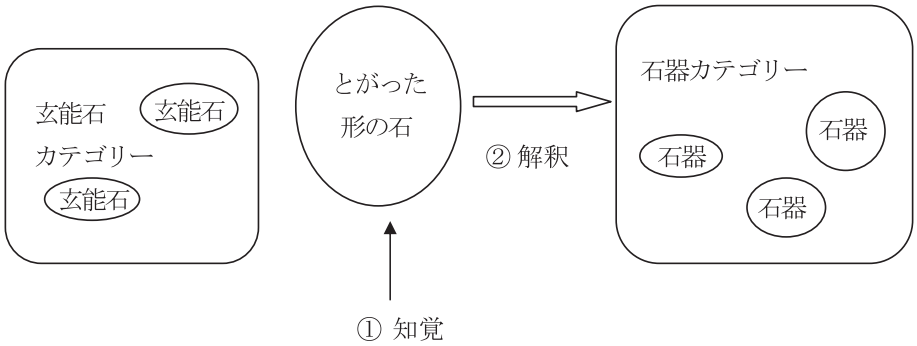

図１

つまり、ミアヤマルは、①の知覚には成功するが、②の解釈に失敗することを表す。①②のプロセスは瞬時に、ほぼ同時に行われることもあり、①とは時間を隔てて②が行われることもある。以下の例で確認できる。

(13)　オニノヤガラとの最初の出合いは、今年９月の芦ケ崎でのことでした。すでに立ち枯れていて、一見ギンリョウソウと見誤まるところでした。
(http://www.najomon.com/page_tsunan/tsunan_shizen/shizen_2/10.html)

(14)　よく考えてみたが、ギンリョウソウと見誤ってしまった。

(13) はちょっと視覚で捉える (「一見（する）」) と同時にした解釈の失敗を表し、(14) は思考のプロセス (「よく考えてみた」) を経た解釈の失敗を表す。

このミアヤマルは、次の (15) のような文型をとる。

(15)　a　主体ガ　　オニノヤガラヲ　　ギンリョウソウト　ミアヤマル
　　b　主体ガ　　立ち枯れた植物ヲ　ギンリョウソウト　ミアヤマル

「Ｘヲ Ｙトミアヤマル」の「Ｘヲ Ｙト」は、「Ｘは Ｙである」という判断内容を表すト節である。次の (16) (17) の容認度の低さによって確認できる。

(16)　??　a　主体ガ　　オニノヤガラト　　ギンリョウソウヲ　ミアヤマル
　　??　b　主体ガ　　立ち枯れた植物ト　ギンリョウソウヲ　ミアヤマル
(17)　??　a　主体ガ　オニノヤガラト　ギンリョウソウトヲ　ミアヤマル
　　??　b　主体ガ　立ち枯れた植物ト　ギンリョウソウトヲ　ミアヤマル

(15) と (16) (17) の容認度の差は、ミアヤマルが判断を表すことによると言える。このことは､先に見た (12) の例でも確認できる。(12) は「石器だと見誤っていた」とあり、判断内容が「石器だ」で明示されている。以下のように、認識判断を表すモダリティ形式と共起することも、その裏付けとなる。

(18)　a　石器だろうト　ミアヤマッテいた
　　b　石器にちがいないト　ミアヤマッテいた

３．１．２　多義的別義２：＜主体が＞＜事柄を判断の対象として＞＜実際とは異なる＞＜解釈をする＞

(19)　首相は周囲に「ある程度覚悟の上だ」と強がったが、世論を見誤ったのは明らかだった。(中日新聞　2009/06/23)（＝（５））

(20)　真の死因を見誤ったために被害が拡大した典型がパロマの事件だ。最初の被害者が一酸化炭素中毒だったことを突き止めておけば、その後の事故は防げただろう。初動捜査で安易に事件性を排除し、解剖をせずに死因を心不全と決めつける事例があまりにも多く、それが日本の死因統計をも信用できないものにしているという。(日経マガジン　2007/10/21)

(19) の「首相が世論を見誤る」は、首相が「ある物事に対する世論はどうであろうか」と考え、例えば、実際には「否定的」であるにも関わらず「肯定的」であると解釈することを表す。(20) の「(警察が) 真の死因を見誤る」は、警察が「死因は何であろうか」と考え、実際には「一酸化炭素中毒」であるにも関わらず「心不全」であると解釈することを表す。多義的別義１との違いは、多義的別儀１は、対象が視覚で捉えられる具体物であり、そのカテゴリーの判定に失敗することを表すのに対し、この多義的別義２は、対象が解釈を必要とする事柄であり、その解釈に失敗することを表す点である。解釈を必要とする事柄とは、以下のようなモノである。

(21)　適性を／本質を／時代を／動向を／変化を／歴史を／民意を／先を／勝負所を／核心の在処を／市場を／リスクをミアヤマル

いずれも、「すぐにわかる」「誰にでもわかる」というのではなく、判断力やデータ分析力などを駆使して、解釈を導き出そうとするというプロセスを経て明らかになる事柄である。この「判断力やデータ分析力を駆使して導きだす」というプロセスは、以下のような例でその存在が確認できる。

(22)　民意を探るため、意見交換会などを積極的に開いてきたが、見誤っていたと言わざるを得ない。
(23)　なんとかして先を読もうと努力はしたのだが、結局先を見誤ってしまった。

(22) の「意見交換会の開催」、(23) の「先を読むための努力」というのは、「民意が何であるか」「先はどうなるか」を解釈しようと意識的に判断の対象としたということである。(20) は、文脈に「解剖をせずに死因を心不全と決めつける」とあり、「導き出す」というプロセスがないようにも感じられるが、事件の捜査を任務とする警察には「死因は何であるか」という問題意識はある。それが、「判断の対象とする」ということである。

多義的別儀１同様、次のような文型をとる。

(24)　a　警察ガ　真の死因ヲ　心不全（だ）ト　ミアヤマル
　　b　警察が　一酸化炭素中毒ヲ　心不全（だ）ト　ミアヤマル

「Ｘヲ Ｙトミアマル」の「Ｘヲ Ｙト」は、「Ｘハ Ｙである」という判断内容を表すト節である。

ミアヤマルは、多義的別義１と多義的別義２から「主体が対象について実態とは異なった解釈をする」というスキーマが抽出でき、思考のプロセスを経た判断の失敗を表す。

３．２　ミマチガエルの意味

本節では、ミマチガエルの有する２つの多義的別義を記述する。各多義的別義については、まず分析の結果である意味記述を示し、その意味を例文に基づき説明するという順で進める。最後に、２つの多義的別義から抽出されるスキーマを明示する。

３．２．１　多義的別義１：＜主体が＞＜具体物を＞＜視覚によって＞＜別のモノと錯覚する＞

(25)　金融機関で重要な作業として「確認する」ことが挙げられます。私は入庫間もな

い頃、この「確認する」を怠り、集計数字が合わなくなってしまったことがありました。機械にデータを打ち込んでいった際、数字が合えば「一致」あっていなければ「不一致」と画面に表示されます。「不一致」と表示が出ていたのに、私は「一致」と見間違え、作業を続けてしまいました。
（http://rikunabi2010.yahoo.co.jp/bin/KDBG00700.cgi?KOKYAKU_ID=0235542001&MAGIC=&FOR_ID=K101）

(26)　「カゲが見たいわ」の投稿を「ガケが見たいわ」と見間違え、崖の写真が見られる！と期待してしまいました。
（http://portal.nifty.com/cs/mitaiwa/detail/090707103188/1.htm）

(25) の「不一致を一致と見間違える」は、「不一致」という文字を見ているにも関わらず、主体には「不一致」ではなく「一致」という文字に見えることを表す。視覚が錯覚を起こし、「不一致」とは別の「一致」として知覚されるのである。(26) の「カゲをガケと見間違える」は、「カゲ」という文字を見ているにも関わらず、主体には「カゲ」ではなく「ガケ」という文字に見えることを表す。「視覚の錯覚」により、「カゲ」とは別の「ガケ」として知覚されるのである。どちらも「視覚で捉えられる」文字を対象としており、対象を文字形式が類似した別の文字と錯覚することが表されている。次の例は、姿・形や色の類似による錯覚の例である。

(27)　親友のまゆたんの旦那さんは超可愛がっていたクワガタを暗闇でゴキブリと見間違え、ママレモンをぶっかけて薬殺したそうな・・・
（http://www.netricoh.com/contents/antenna/obanext/data/0083.html）

(27) の「旦那さんがクワガタを暗闇で見間違える」は、旦那さんが「クワガタ」を見て「ゴキブリ」と錯覚することを表す。「クワガタ」と「ゴキブリ」は、形も色も類似しており、暗闇の中では「クワガタ」が「ゴキブリ」に見えたのである。

この「別のものに見える」という「視覚の錯覚」は、「判断の失敗」ではなく、「知覚の失敗」である。「視覚によって錯覚して捉える」とは、視覚で対象を知覚するときに、それが別のモノとして知覚されるということである。知覚に成功するプロセス、知覚に失敗するプロセスを (27) を例に図示すると、それぞれ以下の図２、図３のようになる。

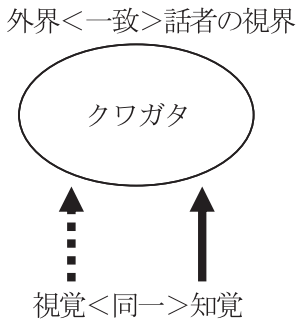

図２

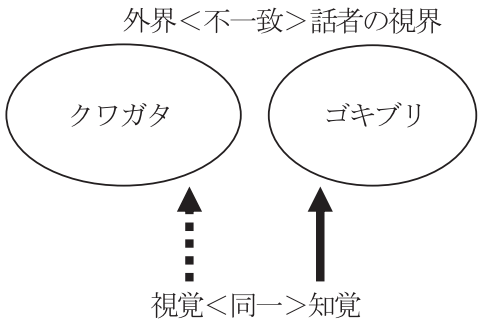

図３

図中の「「視覚」＜同一＞「知覚」」は、「視覚」と「知覚」が同じ一つのプロセスであるということを示している。知覚に成功する場合というのは、「外界における対象」と「話者の視界における（＝話者の目に映る）対象」が一致している場合であるのに対し、知覚に失敗する場合というのは、その二者が一致していない場合である。ミマチガエルが知覚の失敗であり、瞬時に起きることは、以下の（28）（29）で確認できる。

(28)　＊　一見クワガタをゴキブリにミマチガエル
(29)　＊　よく考えてクワガタをゴキブリにミマチガエル

(28) が容認されないのは、「一見」とミマチガエルの時差があってはならないからである。つまり、ミマチガエルが表すのは「クワガタをちょっと視覚で捉えてゴキブリと知覚する」ことではなく、「クワガタをゴキブリとして視覚で捉える」ことである。(29) の「よく考えて」という言語表現は思考のプロセスを明示化するため、ミマチガエルとは共起しない。

このミマチガエルは、次の（30）（31）（32）のような文型をとる。

(30)　主体ガ　クワガタヲ　　ゴキブリト　ミマチガエル
(31)　主体ガ　クワガタト　　ゴキブリヲ　ミマチガエル
(32)　主体ガ　クワガタト　ゴキブリトヲ　ミマチガエル

「ＸヲＹトミマチガエル」の「Ｙト」は、「対称関係における相手を表す」（益岡・田窪 1992：78）。このことは、次の（33）（34）の容認度の低さによって確認できる。

(33)　??　主体ガ　　茶色い虫ヲ　ゴキブリト　ミマチガエル
(34)　??　主体ガ　　茶色い虫ト　ゴキブリヲ　ミマチガエル

(30)(31)(32)が言えて、(33)(34)が言えないのは、「ゴキブリ」と「クワガタ」は対称関係にあるが、「茶色い虫」と「クワガタ」は対称関係にないためである。

また、ミマチガエルが「判断の失敗」を表さないことは、以下の(35)で確認できる。

(35)　??　a　クワガタヲ　ゴキブリだと　ミマガエテタ
　　??　b　クワガタヲ　ゴキブリだろうと　ミマチガエタ
　　??　c　クワガタヲ　ゴキブリにちがいないと　ミマチガエタ

(35)のように、ミマチガエルは判断内容を表すト節と共起させると容認度が落ちる。

3.2.2　多義的別義2：＜主体が＞＜事柄を＞＜別の事柄と取り違える＞

(36)　つまり遅れていると指摘されている個人の意識改革のためにも、目標がクレジットの取引量の増大にあるのか、CO2の排出量削減にあるのか見間違えないで欲しい。
(http://www.env.go.jp/earth/ondanka/mechanism/carbon_offset/conf/01/gijiroku.html)

(37)　話しを戻すと、マスコミはどのような状況で虐待や無理心中が起きたのかということで、行政は何をやっているんだと、行政の責任を問うこともあります。これは、本質を見間違えているのではないかと思うのです。家族介護は視野が狭くなり、介護することで手一杯になり、他の事に気がまわりにくくなるのです。だからこそマスコミがどういう行政サービスがあってそれをどう利用すればよかったのかという報道の仕方をするべきなんだと思います。同じような状況で最後の一歩をぎりぎり踏みとどまってる方には非常に有用な情報になります。
(http://blog.livedoor.jp/elric2000/archives/cat_50035575.html)

(36)の「目標を見間違える」は、「目標を取り違える」ことを表す。具体的には、「CO2の排出削減」が本来の目標であるにも関わらず、それを「クレジットの取引量の増大」が目標であると取り違えることが表されている。(37)の「本質を見間違える」は、「本質を取り違える」ことを表す。具体的には、「どういう行政サービスがあってそれをどう利用すればよかったのかを報道すること」がマスコミの役目だというコトの本質を「行政の責任を問うこと」がマスコミの役目であると取り違えることが表されている。

この「主体が対象を取り違える」という記述は、「主体が事柄を意識的に判断の対象とする」というプロセスを経ていないということを明示することを意図したものである。(36)は、話者の主体に対する「見間違えないで欲しい」という望みが表されている。(37)は、話者が主体は「本質を見間違えているのではないか」と問題を提起して

いる。つまり、主体自身は「目標が何であるか」「本質が何であるか」を意識的に解釈しようとしているわけではない。つまり、判断の対象とするわけではなく、「そういうもの」として認知しているが、その認知が正しくないということである。

多義的別義１同様、以下のような文型をとる。

(38)　CO2 の排出削減ヲ　クレジットの取引量の増大ト　ミマチガエル
(39)　CO2 の排出削減ト　クレジットの取引量の増大ヲ　ミマチガエル
(40)　CO2 の排出削減ト　クレジットの取引量の増大トヲ　ミマチガエル

以下のような例においては、ミアヤマルをミマチガエルに置き換えることができない。

(41)　毎週同じ時間に行くのに、いつもちょっと遅刻しちゃいます。未だに今の家での準備にかかる時間を見誤っちゃう［＊見間違えちゃう］。
（http://www.celeste-jp.com/article.php?id=639）（＝（７））
(42)　台風の進路を見誤って［＊見間違えて］、予想を外してしまった。

(41) も (42) もいずれも、解釈を導きだそうとする時点で、「事実」が存在しない。「準備にかかる時間」は準備してみて初めて「事実」が生じ、「台風の進路」も台風が進んで行って初めて「事実」が生じる。このような場合には、事実が存在しないが故に、ミマチガエルの「取り違える」という捉え方はできず、(41) (42) の「見誤る」は「見間違える」に置き換えることができない。

ミマチガエルは、多義的別義１と多義的別義２から「主体が対象を実態とは異なって認知する」というスキーマが抽出でき、思考のプロセスを経ない認知の失敗を表す。

３．３　ミアヤマルとミマチガエルの接近

本節では、ミアヤマルとミマチガエルが同じ文脈で用いられる場合について、なぜ意味がほぼ変わらないと感じられるのかを考察する。

３．３．１　対象が具体物である場合

ミアヤマルの多義的別義１とミマチガエルの多義的別義１は、いずれも具体物を対象とした場合の意味である。両者は、これまで検討してきたように、ミアヤマルが「判断の失敗」を表し、ミマチガエルが「知覚の失敗」を表すという違いがある。しかし、多くの場合には置き換えてもあまり意味の差が感じられない。それはなぜだろうか。

ここで、カテゴリー化について考えてみたい。ある対象が所属するカテゴリーを判定する、すなわち、「ある対象が何であるか」を判断する場合に、判断しやすい場合と判断しにくい場合が存在する。具体物であれば、視覚的にプロトタイプと類似していればカテゴリーの判定がしやすい。例えば、初めて接する動物を目の前にして、「これは何という動物か」と考えるとする。視覚的に犬によく似ていれば、容易に「これは犬である」と判定できる。つまり、視覚的に捉えられる類似性は、カテゴリー化を容易にするのである。以下の例（43）で考えてみよう。実例では「見誤る」が用いられているが、これを「見間違える」に置き換えても、意味の差はほとんど感じられない。

(43)　高知県・足摺岬沖の豊後水道周辺で国籍不明の潜水艦が領海侵犯したとされる問題で、防衛省･自衛隊はクジラを潜水艦と見誤った公算が大きいとの見方を固めた。（中日新聞　2008/09/21）

海上の大きな物体を見て「これは潜水艦である」と判断するのに要する時間は、潜水艦のプロトタイプに似ていれば似ているほど短いと考えられる。潜水艦のプロトタイプにそっくりであれば､瞬時に｢潜水艦である｣と判断できる。これは潜水艦の｢カテゴリー｣を判定する捉え方である。一方で、対象が潜水艦に似ていれば似ているほど錯覚も置きやすい。実際にはクジラを見ていても、潜水艦によく似ていれば、潜水艦と錯覚し、潜水艦として知覚される。これは、潜水艦を「具体例」として捉える捉え方である。しかし、「具体例としての潜水艦」を知覚すれば、「潜水艦カテゴリーに属する」というカテゴリーの判定も瞬時に行われる。つまり、対象の知覚と解釈が瞬時に行われる場合があり、その場合にはミアヤマルがミマチガエルに接近し、意味の差がほとんどなくなるのだと言える。

３．３．２　対象が抽象物である場合

ミアヤマルの多義的別義２とミマチガエルの多義的別義２は、いずれも事柄を対象とした場合の意味である。両者の違いは､これまで検討してきたように､ミアヤマルが「事柄を判断の対象とする」というプロセスを経るのに対し、ミマチガエルにはそのようなプロセスがない点にある。では、どのような場合に意味が「ほとんど変わらない」と感じられるのだろうか。また、それはなぜだろうか。以下の例に基づいて考えてみたい。

(44)　事故原因について、報道されていることはあくまで『推測』です。（中略）適当な推測を具体的な事実と捉えてしまうと、最悪のケースとして事故原因を見間違え、再発防止に繋がらなくなります。報道は事実だけで放送が成り立てば一番なん

でしょうが、それだと時間が持たないし、視聴者に速報性を求められる現状では確度が低い情報でも番組や紙面に入れていかなければならないという状況も理解できます。（http://grafpress.jugem.cc/?eid=443）

（44）において、「推測された事故原因」が「事実としての事故原因」と異なることが、「事故原因を見間違える」と表されている。これは、「見間違える」が「見誤る」に接近している例である。「事故原因の追求」には、簡単なものから徹底的なものまでさまざまな追求の仕方が考えられる。「事故原因は何だろうか」と積極的に調査をして導きだす場合、解釈を導きだすまでのプロセスには時間がかかる。一方で、大した調査もせず、感覚的に決めつけてしまうような場合、徹底的な調査をした場合に比べて、解釈を導きだすまでのプロセスは短い。つまり、対象が抽象物である場合には、「感覚的な決めつけ」「無意識の解釈」であったとしても、対象が具体物である場合とは異なる「認知のプロセス」が存在すると言える。そのため、ミマチガエルがミアヤマルに接近し、意味の差がほとんどなくなるのだと言える。

4　おわりに

以上、本稿では、類義関係にあるミアヤマルとミマチガエルについて、相互の意味の類似点と相違点を明らかにした。分析の結果、それぞれの語に２つの多義的別義を認め、スキーマを抽出した。

ミアヤマル　多義的別義１
＜主体が＞＜具体物を視覚で捉え＞＜実体とは異なったモノとして＞＜解釈する＞

ミアヤマル　多義的別義２
＜主体が＞＜事柄を判断の対象として＞＜実際とは異なる＞＜解釈をする＞

ミアヤマル　スキーマ
＜主体が＞＜対象について＞＜実態とは異なった解釈をする＞

ミマチガエル　多義的別義１
＜主体が＞＜具体物を＞＜視覚によって＞＜別のモノと錯覚する＞

ミマチガエル　多義的別義２
＜主体が＞＜事柄を＞＜別の事柄と取り違える＞

ミマチガエル　スキーマ
　＜主体が＞＜対象を＞＜実態とは異なって認知する＞

両語の共通点は、「対象を実態とは異なって捉える」ことを表す点である。しかし、ミアヤマルが「思考のプロセスを経た判断が実態と異なる」ことを表すのに対し、ミマチガエルは「思考のプロセスを経ず認知した対象が実態とは異なる」ことを表すという点で相違していることを明らかにした。

また、両語は、対象が具体物である場合には対象の知覚と解釈が瞬時に行われる場合にミアヤマルがミマチガエルに接近し、対象が事柄である場合には「認知のプロセス」の存在からミマチガエルがミアヤマルに接近することを指摘した。

注

1　実例中の表記はそのまま引用した。

2　実例中、分析対象である語には下線を施し、その他注目すべき箇所には二重下線を施した。

引用文献

柴田武・山田進・加藤安彦・籾山洋介（編）（2008）『講談社類語辞典』講談社 .
田中聡子（1999）『視覚動詞の意味論』名古屋大学博士論文 .
中村明・芳賀綏・森田良行（編）（2005）『三省堂類語新辞典』三省堂 .
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版 .

例文出典

CD-ROM 版『新潮文庫の 100 冊』
検索エンジン YAHOO!
日系テレコン 21
中日新聞記事データサービス